あいち
トリエンナーレ
2010

プレスリリース

別冊（参加アーティスト紹介）

2010年8月20日

あいちトリエンナーレ実行委員会事務局
（愛知県県民生活部文化芸術課国際芸術祭推進室内）

★：2010年3月発表アーティスト　☆：2010年６月発表アーティスト　★：2010年7月発表アーティスト　画像は参考です。

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

1



アデル・アブデスメッド　Adel Abdessemed

1971年コンスタンティーヌ(アルジェリア) 生まれ、パリ在住。1994年フランスに移り住んだ彼は、現在起こっている社会のさまざまな問題を掘り下げ、ヴィデオ、写真、パフォーマンスなどで表現する。

《Saturday》 2008　Courtesy of the artist and David Zwirner, New York

---

2☆



秋吉風人　Futo Akiyoshi

1977年大阪府生まれ、大阪府在住。自身の制作行為やアトリエという現場から立ち上がるリアリティに足場を置きながら、「絵画」という概念の解体と再構築の試みを多様なメディアで提示している。あいちでは、金色の油絵具のみを用いて空間を描く平面作品《Room》シリーズを中心に会場を構成する予定。

《Room》 2009　©Futo Akiyoshi 2009 Courtesy of TARO NASU

3★



フアン・アラウホ　Juan Araujo

1971年カラカス（ベネズエラ・ボリバル共和国）生まれ、カラカス在住。アラウホは画集や写真集のあるページを組み合わせ、絵画の絵画、イメージのイメージを作り出すアーティスト。西欧の伝統的なトロンプ・ルイユ（だまし絵）やモダニズム以降の絵画理論を参照しながら、オリジナルに基づいた複製品をさらに絵画で複製するという重層的な表現で、絵画のシステムに挑戦している。今回は、明治村に部分的に移築されたF・L・ライトによる帝国ホテルをリサーチし、そのカタログを複製した絵画連作を展示する。

《Casa de Vidrio 5》 2006

4☆



メルヴェ・ベルクマン　Merve Berkman

1977年イスタンブール（トルコ）生まれ、イスタンブール在住。彼女の作品は、都市の日常世界における様々な光景や、その中に生きる人々のポートレートが主体となっている。作家は、身近な日常生活に密着した映像言語を使うことにより、静寂で平穏な一時を再現しようとする。今回は、この一見して心理的、また時として社会的状況を扱った様に見える映像をまちなかのビルボードとして展示し、通常世界における存在を通して起こるある種の魔法のような思いを喚起させる。

《Elvan》 Istanbul 2005 Courtesy of the artist

5★



ズリカ・ブアブデラ　Zoulikha Bouabdellah

1977年モスクワ生まれ、パリ在住。パリ在住のアルジェリア人ブアブデラは、宗教も含めた複層的な文化体系を重ねていき、ヴィデオやインスタレーションの形で、文化の重なり合いと、人間におけるアイデンティティが持つ意味を優雅に問いかける。今回はアラビア語の「愛」のイメージに、日本人作曲家による現代の音を組み合わせた新作インスタレーションを展示する。

《Al-attlal》2009 ©La B.A.N.K., Paris

6



蔡國強（ツァイ・グオチャン）　Cai Guo-Qiang

1957年中華人民共和国福建省泉州市生まれ。ニューヨーク在住。彼は一貫して火薬を用いた作品制作（火薬の爆発による絵画制作やパフォーマンス）を行うほか、中国文化に由来する物を使ったインスタレーションを多く手がけている。1986年から1995年まで日本に滞在し、名古屋も含めた全国各地で展覧会を行う。2007年に第7回ヒロシマ賞を受賞。2008年北京オリンピックのビジュアル・ディレクター（芸術監督）として開幕式のスペクタクルな花火の演出を手がけたことでも有名。なお、今回のトリエンナーレでは、巨大な和紙を使用した「火薬絵画」を発表する予定。

《Wind Shadow》 2006　Courtesy of Cai Studio

7★

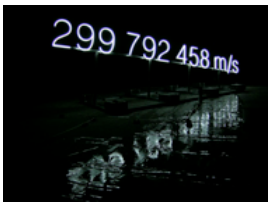


ミケランジェロ・コンサーニ　Michelangelo Consani

1971年リヴォルノ（イタリア）生まれ、リヴォルノ在住。作家は、歴史、それも公式の歴史ではなく、その背後に隠れて考慮されない「別の」歴史に注目しつつ、その深層部分にある原初的なエネルギーに着目する。原初的エネルギーは人々の心を強くとらえるからである。今回のあいちトリエンナーレに出品する作品は、有機農法とその父と呼ばれる福岡正信をテーマとし、その歴史の深層部分に含まれる原初的なエネルギーに焦点をあてる。

《Kill the Butterfly》 2006　Photo : Daniele BACCi

8



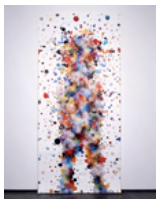
ケリス・ウィン・エヴァンス　Cerith Wyn Evans

1958年イギリス生まれ、ロンドンに在住。セントマーチンズ美術大学とロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学んだあと、デレク・ジャーマンのアシスタントを務め1980年代の彼の実験的映像作品を手がけた。視覚に強く訴えかける詩的かつエレガントな作品には、常に時間や言語の概念が存在する。今回はタイトルでもある光の速度を表す9つの数字、”299792458 m/s”を、ネオンサインのようにまちなかのビルの屋上に設置する。

《299792458 m/s》2004　Installation view at Festpielhaus Bregenz, Bregenz Austria, July, 2006
Courtesy of Taka Ishii Gallery, Tokyo and Jay Jopling / White Cube, London

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

9



トム・フリードマン　Tom Friedman

1965年アメリカ、ミズーリ州セントルイス生まれ。マサチューセッツ州在住。グッゲンハイム美術館をはじめ、欧米の主要美術館で個展を開催している。バブルガム、トイレットペーパー、つまようじ、ストロー…これらの日常のありふれたものを、フリードマンは予想もできなかったような美しい作品に変身させて、新しい彫刻を作り出した作家の一人。今回は、複数の作品を組み合わせたインスタレーションを予定している。

《Untitled》2004 Courtesy of Tomio Koyama Gallery

10



シプリアン・ガイヤール　Cyprien Gaillard

1980年パリ生まれ、ベルリン在住。2009年にニューヨーク、ニューミュージアムでの「Younger Than Jesus」に出品するなどヨーロッパとアメリカで話題の作家。自然と建築との関係を、美術史を踏まえながらダイナミックにヴィデオ、版画などのメディアで時に過激に、時にユーモラスに表現する。 今回発表される新作のヴィデオ《Towards an ethic for the built environment》は、名古屋市郊外で撮影が行われた。

《Desniansky Raion》 2007

11



ジェラティン　Gelitin

オーストリア、ウィーンで活動するアーティスト集団。4人の作家（アリ・ヤンカ、フローリアン・ライター、トビアス・ウルバン、ウォルフガング・ガントナー）から成るユニット。1978年に参加したサマーキャンプで初めて出会い、共同で作品を制作。1993年から、美術史に基づきつつも奇想天外な作品を発表して、常に話題を提供し続けるユニット。 今回は、金属の箔片が無数に舞うという新作を発表する。

《Klunck Garden》2009　Courtesy of Tomio Koyama Gallery Tokyo

12★



オリヴァー・ヘリング　Oliver Herring

1964年ハイデルベルク（ドイツ）生まれ、ニューヨーク在住。都市に生きる見知らぬ人たちとの即興的なコラボレーションを軸にした、ストリート・ヴィデオやパフォーマンスの作品で知られる。新しい出会いと即興の清々しさが溢れるシンプルな作品が高い評価を得ている。今回は、愛知県で制作した新作ヴィデオを発表する。

Still from 《Waterloo》 2007 Courtesy of Oliver Herring and Max Protetch Gallery

---

13



黄世傑（ホアン・スー・チエ）Huang Shih Chieh

1975年台北生まれ、ニューヨーク在住。液体も含むどこででも手に入る日常品を素材に、簡単な電気的な仕掛けを与えて、動きのある色鮮やかな立体的なインスタレーションを試みる。ヴェネツィアも含む世界各地で展示を発表。

《Cubozoa-09》2009　Brisbane, Australia

14★



池田亮司　Ryoji Ikeda

1966年岐阜県生まれ、パリ在住。電子音楽の作曲家、アーティストとして世界的に注目を集める。音や光の物理的特性、時間や空間といった人間の知覚をめぐる様々な条件を極限まで突き詰めてゆくことで、全く新しい体験を促す。音楽と美術の領域を横断する活動を展開している。 今回は、名古屋城二の丸広場にて、空に向かって直立する白色光の壮大なタワーと、サイン波による音風景とによる巨大なインスタレーションを展開する。

《spectra [paris]》 Produced by Le Troisième Pôle / Eva Albarran & Co., co-produced by Forma Commissioned as part of La Nuit Blanche 2008 for the City of Paris　Photo: Marc Domage

---

15☆



泉孝昭　Takaaki Izumi

1975年福岡県生まれ、愛知県在住。自身の環境や経験から主題や素材を選びとり、最小限の手を加え作品として提示する泉は、日常と美術の境界で表現することそのものについての問いかけを行っている。あいちでは、彩色した材木を輸送用パレットのように積み重ねたインスタレーションで会場を構成する予定。

《Pallet》 2009　© Takaaki Izumi 2009 Courtesy of TARO NASU　撮影:山本糾

16☆



ジンミ・ユーン　Jin-me Yoon

1960年ソウル(韓国)生まれ、バンクーバー(カナダ)在住。写真や映像作品を通じて現代を生きる人間のアイデンティティを問い続ける作家。近年は自ら都市を這い回る行為によって、さらに身体的なレベルでの活動を展開しており、今回も同様の新作を撮影・発表する予定。

あいちトリエンナーレ2010：名古屋プロジェクト

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

17☆



アマル・カンワル　Amar Kanwar

1964年ニューデリー（インド）生まれ、。ニューデリー在住。インドをはじめ、政治的対立に苦悩する歴史をもつアジアにしばしば焦点を当てる。詩情溢れる映像を通して、権力に翻弄される正義や性、暴力などが、人々の日々の生活や文化に落とした影を静かに浮かび上がらせる。

Still from 《Henningsvaer》 2006　Courtesy of Amar Kanwar and Galerie Marian Goodman, Paris/ New York　©Amar

18★



ソニア・クーラナ　Sonia Khurana

1968年サハランプール（インド）生まれ、ニューデリー在住。自身の身体を表現媒体として、パフォーマンスや映像など様々なメディアで社会とのかかわりを描き出す。今回は、パフォーミング・アーツ部門で公共の空間に自ら身を横たえるパフォーマンスを通して、都市や空間との出会いの究極の形を提示、ビジュアル・アーツ部門でも写真や映像などのインスタレーションを展開する。

image from the project《lying-down-in-the-ground : version I》 ©2006

19



ヤコブ・キルケゴール　Jacob Kirkegaard

1975年コペンハーゲン（デンマーク）生まれ、ベルリン在住。共鳴や時間、音や聴覚の自然科学かつ美学的観点に着目する。彼のインスタレーションやパフォーマンスでは、通常であれば認知されない聴覚の空間や現象を扱う。彼が工夫して作り出した録音装置を用いて、砂漠や原子力発電所などさまざまな環境の中に存在する、耳には聞こえない音を把捉し、それを構造化する。今回は、オマーンの砂漠の音をその映像とともに展示する。

《SABULATION》 2010　©Jacob Kirkegaard

20★



ルシア・コッホ　Lucia Koch

1966年ポルト・アレグレ（ブラジル）生まれ、サンパウロ在住。彼女の光と色彩を用いたインスタレーションは、常に光と建築との複雑な関係に対する深い関心に基づいている。今回は、長者町の街並が経験しつつある社会的、経済的な変化に対して敏感に反応する。店先や日よけ、繊維製品、傘など様々な場所や形に色彩豊かなグラデーションのパターンを適用し、これまでにないやり方で繊維問屋街としての歴史をもつ風景を変えてゆく。

《Degradé SP》 2004　Paçodas Artes, São Paulo

21



小金沢健人　Takehito Koganezawa

1974年東京生まれ、ベルリン在住。98年武蔵野美術大学卒業後、99年からベルリンを拠点にして、世界各地で作品を制作発表する。日々の生活のなかで起こりうる出来事、その現象、音やリズムといった感覚などを独自の視点で切り取り、映像やインスタレーション、ドローイング、パフォーマンスに変える。今回は、作家がおよそ10年にわたり録り溜めた音《Forgotten ears》と、多数のプロジェクターを使った新作映像《Paint it Black, and Erase》を発表。

《速度の落書き》 2008　神奈川県民ホールギャラリー「あれとこれとのあいだ」展での展示　撮影：佐藤美咲

22★



小泉明郎　Meiro Koizumi

1976年群馬県生まれ、神奈川県在住。映像のアーティスト。ユーモラスに時にグロテスクに、作者も含めた人間同士のコミュニケーションのずれや崩壊を示す。今回は新宿の交差点を風景として、新作ヴィデオを発表する。

《僕の声はきっとあなたに届いている》 2009

23★

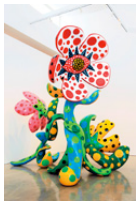


クー・ジュンガ　Koo Jeong A

1967年ソウル（韓国）生まれ、ロンドン、ベルリン在住。非常に繊細なインスタレーションという形をとる彼女の作品は、常に展示場所のコンテクストと深い関わりを持ち、制作場所や制作期間から得た印象が、あたかも物質化したようにわれわれの前に立ち現れる。そこには出会い、行為、作法、そして思索の結果としての控えめな存在感が表れている。

《Fantasissima & Fantasissimousss》 2009　Installation: The 53rd Venice Biennale, 2009

24



草間彌生　Yayoi Kusama

1929年長野県松本市生まれ。東京在住。10歳の頃より水玉と網模様をモチーフに絵を描き始める。1957年に渡米し、巨大な平面作品、ソフトスカルプチャー、鏡や電飾を使った環境彫刻を発表。1973年帰国。1993年第45回ヴェネツィア・ビエンナーレに参加。

《真夜中に咲く花》©Yayoi Kusama, Yayoi Kusama Studio Inc.　Courtesy of Gagosian Gallery / Ota Fine Arts

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

25

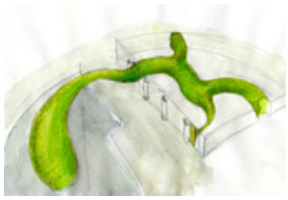


フィロズ・マハムド　Firoz Mahmud

バングラデシュのクルナ生まれ。ダッカを活動の拠点として世界各地で展覧会を開催。政治や社会を象徴的に扱いながら、絵画、立体、映像など、さまざまなメディアで表現する。今回は、軍国主義の象徴としての戦闘機を、市民の生活や生存を象徴する穀物で覆い尽くした立体作品の新作を発表する。

《Sucker' wfp21》のためのプラン　2009-2010

26

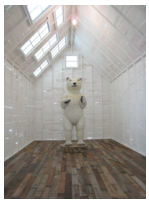


松井紫朗　Shiro Matsui

1960年奈良県生まれ、京都在住。メビウスの輪やクラインの壷のように、空間の内／外の境界を超えていくようなダイナミックなインスタレーション作品を国内外で発表してきた。愛知芸術文化センターに登場するグリーンの巨大なバルーン作品では、建物の内側と外側を行き来する体験ができる。

あいちトリエンナーレ2010のためのプラン　2009

27



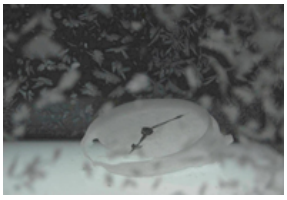
三沢厚彦 + 豊嶋秀樹　Atsuhiko Misawa + Hideki Toyoshima

三沢厚彦は樟から彫り出した等身大の動物彫刻で知られる。その独特の体躯と表情は、馴染み深い動物に対して抱く一般的なイメージの向こう側にある、動物そのものの存在を強く感じさせる。豊嶋秀樹は展覧会の空間構成からキュレーターとしての活動まで、インスタレーション、展示、展覧会に対する幅広いアプローチを行っている。今回はユニットとして、三沢の彫刻と豊嶋の空間構成とを組み合わせた巨大なインスタレーションを展開する予定。

《Animal2007−03（白クマ）と白い小屋》「ANIMALS+」展、平塚市美術館での展示　©Atsuhiko Misawa

---

28

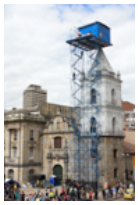


宮永愛子　Aiko Miyanaga

1974年京都市生まれ、在住。2008年に東京芸術大学美術学部先端芸術表現専攻修士課程卒業。衣服や靴などの日用品をナフタリンでかたどった作品や、川や海から抽出した塩の結晶を育てた作品など、時間とともに変化してゆく立体作品を制作する。

《色 -color of silence- (時計)》 2009

29



西野達　Tatzu Nishi

1960年名古屋市生まれ。現在、ベルリンと東京を拠点に活動する。武蔵野美術大学を卒業後、1987年にドイツに渡り、ミュンスター芸術アカデミーで彫刻を学んだ後、1997年から主にヨーロッパで活動。都市を舞台とした、人々を多く巻き込む大胆で冒険的なプロジェクトを数多く発表。

《Cross》2009 Bogota, Colombia Photo: Laura Rico

30☆



オー・インファン　Inhwan Oh

1964年ソウル（韓国）生まれ、ソウル在住。写真、インスタレーションプロジェクトなど様々な方法を用いるが、一貫して、ものが認識される過程や認識の規範を浮かび上がらせることに関心を持ち続けている。今回は、あいちのための新しいインスタレーションを発表予定。

《Where a Man Meets Man in Santiago》(detail)　2007 Courtesy of the artist

---

31



ハンス・オプ・デ・ビーク　Hans Op de Beeck

1969年ベルギーのトゥルンホウト生まれ。ブリュッセルで活動。モノクロームの水彩画、白い立体作品からアニメーションの映像作品まで、さまざまな素材と技術を用いて、鑑賞者に不思議な体験を促す。 最新作であるヴィデオ・インスタレーション《Staging Silence》では、作家の記憶とその空間が交錯する。

《Staging Silence》2009 Courtesy of Galleria Continua, San Gimignano - Beijing - Le Moulin

---

32☆



ラクウェル・オーメラ　Raquel Ormella

1969年シドニー（オーストラリア）生まれ、シドニー在住。現代社会に生きるわれわれをとりまく様々な問題を、素朴でいながらも鋭い視点で切り取るラクゥエル・オーメラ。今回は、日本の都市における人間と自然（野鳥）との関係をテーマに、３つのヴィデオ作品を制作予定。

《Varied Tit Feeders》2010

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

33★



アマリア・ピカ　Amalia Pica

インスタレーション、パフォーマンス、ヴィデオ、写真など極めて多彩な形式を用いて、場やコミュニティの集合的な記憶、日常的な物や状況を巧みに拾い上げる彼女の作品は、常識に対する挑戦や現実を生き抜くための方法を詩的に暗示している。時にユーモラスなピカの作品は、社会の構造を顕示する象徴的な物事についての批評でもある。

《SOME OF THAT COLOUR》 2009

34★

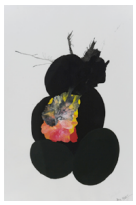


ナウィン・ラワンチャイクン　Navin Rawanchaikul

1971年チェンマイ（タイ）生まれ。社会とアートとの関係を刷新し続ける、多様な作品やプロジェクトで知られる。発表する地域の特徴を注意深く読み解き、そこに息づく文化や歴史を素材に、訪れる者との様々な出会いの場を創出する。

《Mario Sisters》 2008　Courtesy of Navin Production Co., Ltd.

35★



ジラユ・ルアンジャラス　Jirayu Rengjaras

1980年カラシン（タイ）生まれ、カラシン在住。タイの東北部に広がる地方イサンで２年前に作家活動を独学から始めたタイの若手作家。今回のあいちトリエンナーレに出品する作品は、大きな壁画に加えて、日本人作家・森北伸とのコラボレーションによって初制作となる彫刻作品を予定している。

《Untitled (Rompo Mansions 3)》2009

36



ダヴィデ・リヴァルタ　Davide Rivalta

1974年ボローニャ生まれ、ボローニャ在住。ゴリラやサイなどの、ほぼ等身大の動物の形をブロンズなどで作り、まちなかも含めた、意外性のある状況に設置する彫刻家。現実と虚構とがないまぜになって、作品を見る者に驚きをもたらす。

《サイ》 2005

37



志賀理江子　Lieko Shiga

1980年愛知県生まれ、宮城県在住。2004年にロンドン芸術大学チェルシーカレッジを卒業。その後、ブリスベン、仙台、シンガポールで滞在制作を行う。徹底したリサーチを基に行う写真制作により、シリーズ作品を展開。 2008年に木村伊兵衛写真賞を、2009年 にICPのインフィニティアワード新人賞を受賞するなど、もっとも注目される若手写真家のひとりとして活躍中。写真集に「Lilly」(2008/アートビートパブリッシャーズ)、「CANARY」（2008/赤々舎）。

《Portrait of Land Reclamation – Expanding Bloodlines》 2009 From "The Annals of Kitakama Village" series

---

38



島袋道浩　Shimabuku

1969年神戸市生まれ。ベルリン在住。1992年サンフランシスコ・アート・インスティチュート卒業。90年代初頭よりサイトスペシフィックなプロジェクトやパフォーマンスを中心に国内外の様々な場所で活動。 今回、愛知県の知多郡南知多町篠島で、島の文化の底力を背景とした運命的な出会いを経験した島袋は、漁村における現代美術を模索する。

《空が海だったころ》2002 オーストリア、シュワッツでのパフォーマンス

39☆



塩田千春　Chiharu Shiota

1972年大阪府生まれ、ベルリン（ドイツ）在住。私的な記憶や感覚をもとに、自身の存在と不在あるいはアイデンティティへの不安を様々な媒体で表現してきた塩田千春。今回はあいちトリエンナーレのために制作する、詩的で印象的なインスタレーション作品の最新作を発表予定。

《流れる水》 2009　 入善町下山芸術の森発電所美術館

40☆



サンティアゴ・シエラ　Santiago Sierra

1966年マドリッド（スペイン）生まれ、ルッカ、マドリッド在住。作家は、作品を制作する際に一般の人々を募り、その人々に課した労働に対する報酬という経済原則の一つをかたどったパフォーマンスや、それを記録した白黒写真を通じて、社会の隠された権力構造を露にする。今回は「No Global Tour」シリーズの一環として、《NO》という巨大なアルファベットの看板をトラックの荷台に搭載し、まちなかに駐車するという作品を出品する。

《NO》 2009　Courtesy of Prometeogallery di Ida Pisani

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

41★

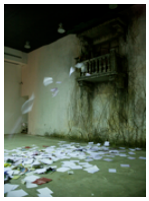


カーメン・ストヤノフ　Kamen Stoyanov

1977年ルセ（ブルガリア）生まれ、ウィーン在住。日常の中で出会った人や物を素材にして主にヴィデオやインスタレーションを手がける。今回は、名古屋滞在中に偶然出会った男性を取材したヴィデオ作品と、ブルガリア出身である作家のアイデンティティと日本をつなぐプロジェクトに基づいた新作を出品予定。

《Cultural Moussaka》2010

42★



孫原＋彭禹（スン・ユァン ＋ ポン・ユゥ）　Sun Yuan + Peng Yu

1972年北京生まれのスン・ユァンと1974年黒竜江省生まれのポン・ユゥのユニット。2000年よりユニットとして活動を始め、中国の現代美術を牽引する作家として各地で活躍している。人体、動物等を多用した、従来の表現方法を超えた大胆な手法で、現代に生きる人々を取り巻く生と死の状況をシニカルに浮き彫りにする。

《一時清醒》 2008 韓之演当代芝木空間（中国・北京でのインスタレーション）

43★



高嶺格　Tadasu Takamine

1968年鹿児島県生まれ、滋賀県在住。パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、身体を軸とした多様なメディアを駆使して、自己と他者、社会と新しい関係を築いていく関わりのプロセスを作品として昇華させる。舞台作品の演出等も多数手がける。今回は、名古屋の小劇場「七ツ寺共同スタジオ」にて新作を発表する。

《Blackice》 2005　せんだいメディアテーク

44☆



登山博文　Hirofumi Toyama

1967年福岡県生まれ。愛知県在住。登山は見たことのないものを描くことを理想とする。現れるイメージに呼応してドローイングを行いながら、意図を排し、イメージが意味へと収束する手前に留まることで、描くこと／生成そのものが現れるタブローの制作を試みている。今回は大画面の新作３点を発表する。

《ドローイング | タブローI》2008　撮影:怡土鉄夫

45



タチアナ・トゥルーヴェ　Tatiana Trouvé

1968年イタリアのコセンツァ生まれ、パリ在住。床、天井、そして壁に金属素材の線や形を配置することで、垂直と水平が不安定な、不穏に見える空間を作り出すインスタレーション作家。2007年のマルセル・デュシャン賞を受賞。今回は、神社の鳥居を連想させるような透明な扉が連なってみえる作品と、ガラス越しにみえる不穏な部屋という、二つの相反する空間を共存させる。

《Untitled》 from the series "Intranquility"　2006　Collection Musée National d'Art Moderne/Centre Pompidou
Photo : André Morin ©Tatiana Trouvé Courtesy of Galerie Emmanuel Perrotin, Paris & Miami

---

46★



蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）Tsai Ming Liang

1957年マレーシア生まれ、台北在住。現代台湾を代表する映画監督であるツァイは、映画そのものをめぐる物語をコミカルにしばしばセンチメンタルに扱い、観客と映画（映像）との関係について問いかける。今回は、複数の映像モニターを仕込んだインスタレーションにも取り組む。

《Erotic Space II》2010　premier in Aichi Triennale 2010　Courtesy of Tsai Ming Liang & Winder Chen

---

47



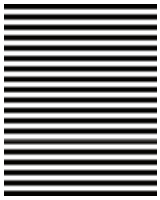
曾建華（ツァン・キンワ）Tsang Kin Wah

1976年中国汕頭生まれ、香港在住。文字で構成された唐草、花など植物の図案がダイナミックに空間に広がる。作品形態は壁紙、あるいは動画としてプロジェクションしたもので、毒のある言葉と優美な模様という異質なものを融合させている。今回の作品は、シリーズ《The Seven Seals》の1つで、複数のプロジェクターを使ってテロップのように流れるテキストが壁全体を怒濤のように覆い尽くしてゆくインスタレーション。

《The Third Seal - They Are Already Old. They Don't Need To Exist Anymore.》Installation at Pekin Fine Arts, Beijing 2009　Courtesy of the artist

---

48



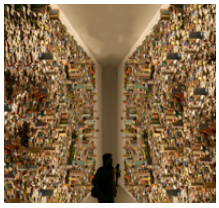
梅田宏明　Hiroaki Umeda

1977年東京生まれ、在住。2000年より創作活動を開始。自身の作品では振付・ダンスのみならず映像・音・照明デザインまで担い、「振付家、ダンサーというよりVisual Artist でありMoverである」と評価され、ヨーロッパを中心に世界各地の主要フェスティバルに招聘されている。今回のトリエンナーレには、光とサウンドによる体験型インスタレーションを出品予定。

《無題》 2009

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術）

49★



ヘマ・ウパディヤイ　Hema Upadhyay

1972年ヴァドーダラー（インド）生まれ、ムンバイ在住。人々の移住や移動に派生するノスタルジーやアイデンティティを主なテーマとする。今回は様々な建造物のモチーフを用いて、近代化が生み出したランドスケープがはらむ都市の混沌と緊張を、体感型インスタレーションとして発表。

《Think left, Think right, Think low, Think tight》のためのプラン 2010　©Hema Upadhyay

---

50



渡辺英司　Eiji Watanabe

1961年愛知県生まれ、名古屋市在住。図鑑から切り抜かれた無数の植物や蝶のインスタレーションで知られる渡辺は、近年は若手や海外の作家に様々な発表の機会を提案するオーガナイザーとしても高い評価を得つつある。長者町の空店舗を使用する今回は、イギリス人作家のトーマス＆ローリー・クラークを招聘し、彼らのインスタレーションと自身の作品とを連動させた展示を試みる。8月21日のオープニングには、御園小学校体育館にて1日限りの作品展示を行う。

《蝶瞰図 ケルンギャラリー インスタレーション》 2009

51★



フランツ・ヴェスト　Franz West

1947年ウィーン生まれ、在住。オブジェクトと身体の関係性を、さまざまな素材を用いた立体やインスタレーションなどの制作を通して探る。ドクメンタ（92年、97年）、ミュンスター彫刻プロジェクト（97年）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（88年、93年、97年、03年）などの国際展やニューヨーク近代美術館での個展（97年）で高い評価を受けている。今回展示される《Untitled》では、作品と観客の距離感を伺うような設置をしている。

《Untitled》2009 ©Franz West　Photo：Heiri Haefliger Coutesy of the artist and Gagosian Gallery

---

52



楊福東（ヤン・フードン）　Yang Fudong

1971年北京生まれ、上海在住。2001年の第1回横浜トリエンナーレで中国国外での初発表をきっかけとして、2002年のドクメンタ、2007年のヴェネツィア・ビエンナーレに出品するなど、国際的な映像作家としての道を進み、その名声を確固たるものとした。 納屋橋会場内の旧ボウリング場が今回の展示スペースとなる。

《Dawn Mist, Separation Faith》 2009

53



エクトール・サモラ　Héctor Zamora

1974年メキシコシティ生まれ、サン・パウロ在住。運河や公園のようなまちなか、あるいは美術館のような建物において、日常的なさまざまな素材で、建築の特性を活用したインスタレーションを行う作家。今回、愛知県美術館では懸垂曲線をめぐるコンクリートのオブジェ《Sesshas》、名古屋市美術館では幾何学的な構造体に誰もが利用可能なハンモックを吊るインスタレーション《Daring Leisure》を展示する。

《Sesshas》2010 Courtesy of Labor gallery

54



張洹（ジャン・ホァン）　Zhang Huan

1965年安陽生まれ、上海とニューヨークに在住。彼のキャリアは1993年の北京郊外にある東村という芸術村でのパフォーマンスに始まる。今は、巨大なぬいぐるみのようなオブジェの圧倒的なインスタレーションを展開している。今回は、牛皮で覆われた先史時代の巨人《ヒーロー》の圧倒的なインスタレーションを予定。

《Hero No.2》 2009　Courtesy of Zhang Huan Studio

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術_まちなかアーティスト）

55★



青田真也　Shinya Aota

1982年大阪府生まれ、愛知県在住。身近な大量生産品の表面をヤスリですり落とし、見慣れた表層を奪い去ることで、それらの実質を逆説的に顕在化させる作品を制作。近年は「モノ」にとどまらず、「空間」に対しても精力的な取り組みを見せている。

《untitled》 2007

56



淺井裕介　Yusuke Asai

1981年東京生まれ、在住。絵描き。日常にある身の回りの素材を用いながら、絵画やドローイングを制作。代表作として、マスキングテープを用いて植物の絵を増殖させる「Masking Plant」や、現地で採取した泥や土を使用した泥の壁画などがある。建築家、ミュージシャン、ダンサーとのコラボレーションプロジェクトやワークショップなども多数行っている。VOCA2009展大原美術館賞受賞。 今回は長者町内の空間で新作を発表する。

《室内森／粘土神》2009「長者町プロジェクト2009」での展示　撮影：山田亘

57★

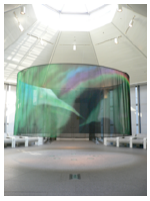


マーク・ボスウィック　Mark Borthwick

1966年ロンドン生まれ、ニューヨーク在住。90年代にファッション写真の概念を打ち壊したマーク・ボスヴィックは、植物を用いたアッサンブラージュや、変容させた写真を使ったコラージュ、そしてインスタレーション、さらにはライブ演奏も加えて、ビルの屋内にユニークな空間を作り出す。

《kiss'in lemon's》 2005　Courtesy of the artist and GALLERY SIDE 2

58★



市川武史　Takefumi Ichikawa

1971年愛知県生まれ、愛知県在住。多摩美術大学大学院修了。ビニール等の素材を用いた透明感のある彫刻が浮遊する空間を作り出す。インスタレーションを中心に、絵画や彫刻といったジャンルを越えた様々な活動を行うアーティスト。

《オーロラ '09》 2009　愛知県美術館での展示

59★



石田達郎　Tatsuo Ishida

1974年愛知県生まれ、愛知県在住。絵画や造形作品の制作を行う傍ら、「ジェット達」としてパフォーマンス活動を行う。言語や身体によって描き出されるその情景は、彼の作品と同様、記憶の内側に広がる「世界」の鮮やかな反映として開示される。

《いそぎんちゃくん》 2009　「長者町プロジェクト2009」でのパフォーマンス

60★



ジュー・チュンリン　Joo Choon Lin

1984年シンガポール生まれ、シンガポール在住。まちなかの様々な光景や日常的な道具に独特のドローイングを組み合わせたコマ撮りのアニメーション作品を発表している。2009年福岡アジアトリエンナーレに参加。今回は、長者町の光景を取り込みながら作品制作を行う予定。

Still-image of《Come Out And Play! 2》 2009

61★



川見俊　Shun Kawami

1981年静岡県生まれ、愛知県在住。ペンキで描く絵画や大量のタッパーを用いたインスタレーションなど、日常生活において慣れ親しんだ物品が放つ感覚的な文脈を巧みに組み替えることによって、視る者が抱くイメージの内部に造形を行う。

《東栄町スペシャル》 2009

62★



木村崇人　Takahito Kimura

1971年愛知県生まれ、山梨県在住。東京藝術大学博士課程修了後、「地球と遊ぶ」というテーマで、様々な自然現象を通じて普段は気付かない地球の力を視覚化するユニークな作品を発表。鑑賞者が作品を直接体験できるワークショップも各地で積極的に展開している。

《星の木もれ陽プロジェクト》 Photo: Yasutaka Kamio

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術_まちなかアーティスト）

63



KOSUGE1-16　コスゲイチノジュウロク

車田智志乃（1977年福島県生まれ）、土谷享(1977年埼玉県生まれ)の二人組のアーティストユニット。2001年より活動開始。日常のありふれた環境や、現象、人のつながりを作品制作のきっかけに、作品を介在させることで鑑賞者を参加者として変質させ、参加者同士、あるいは作品と参加者の間に「もちつもたれつ」という関係性を構築している。アートが身近な場所で生活を豊かにしていく存在として成立する事を目的にしている。近年では、「スポ研」「ドンドコ！巨大紙相撲」「自転車部」、クツ創家、佐藤いちろうとのコラボレーション「skin project」などのプロジェクトを展開している。 今回は、戦争で消失してしまった長者町の山車（だし）をまちと協同して制作する《長者町山車プロジェクト》を展開する。

《長者町山車プロジェクトのためのドローイング》　2009

64★



村田峰紀　Mineki Murata

1979年群馬県生まれ、埼玉県在住。多摩美術大学卒業。自らの身体を酷使し、言語化することができない身体感覚を鑑賞者に示すことで強いインパクトを与えるゲリラ的なパフォーマンスや、その結果として産み出されるインスタレーションを発表している。

《背中で語る》 2008～　愛知芸術文化センターでのパフォーマンス

65★



小栗沙弥子　Sayako Oguri

1978年岐阜県生まれ、岐阜県在住。愛知県立芸術大学卒業。建物の窓のような場所に、新聞の薄い広告チラシをつなぎあわせ張り合わせたりして、植物のように繁殖していく地図に見せるなど、ささやかながら、建物と都市へのアプローチを得意とする。

《マーキング》 2007　ソウル市美術館

66★



ジム・オヴェルメン　Jim Ovelmen

1970年イリノイ州（アメリカ）生まれ、ロサンゼルス在住。巨大資本による商業映画の制作や配給とは対極に位置するパーソナルなアニメーション作品を制作。自身の楽器演奏に合わせたライブ上映を行うなど、場との関係性や作品の一回性にも強い関心を寄せている。

《Queens of Sorrow》2009　Live performance at“Chojamachi project 2009”

67★

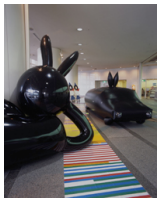


ピップ&ポップ　Pip & Pop

1981年シドニー生まれのニコル・アンドリヤヴィチと1972年パース生まれのタニヤ・シュルツの二人によるアーティストユニット。プラスチック製品や折り紙、顔料粉などさまざまな素材を用い、ファンタジックで幸福感に満ちたインスタレーションを作りあげる。

《Under the Crystal Sky》 2009　Japan Foundation, Sydney Australia

68★



ナタリヤ・リボヴィッチ & 藤田央　Natalija Ribovic & Toru Fujita

1976年ノビサッド（セルビア）生まれでドイツ国籍のルテーニア人リボヴィッチと1972年東京都生まれの藤田のアーティストユニット。東京、ベルリン、ウィーンを拠点に、テクノロジーと人間の精神と自然との関係に着目し、イデオロギーを越えたコミュニケーションを誘発するプロジェクトを行っている。

《BLACK USAGI》他　2009　愛知芸術文化センターでのインスタレーション

69



斉と公平太　Kouheita Saito

1972年愛知県生まれ。1995年に名古屋造形芸術大学を卒業し、名古屋を中心に発表活動を行う。1997年に水戸芸術館（クリテリオム26）にて個展開催。また、1998年にVOCA展、2000年には「空き地」（豊田市美術館）に選出。2005年には第8回岡本太郎記念現代芸術大賞展にて特別賞を受賞。キッチュな素材を用いて「非美術」の領域を美術内部へと反転する取り組みを続ける。2009年、斎藤公平より改名。 今回は 長者町内に「LOVEちショップ」を開店し、グッズ販売を行う。

《LOVEち・ARTくん》 2008-09

70★



志村信裕　Nobuhiro Shimura

1982年東京都生まれ、神奈川県在住。身近な素材を被写体とした映像を路地裏、樹木などの都市の隙間や建築内に投影するインスタレーションを展開。空間への直接的なアプローチと抽象化されたイメージが交わり、新たな視点と場を作りあげる。 今回は、長者町の景観に着目し、店舗の庇（ひさし）をスクリーンにした新作を発表する。

《赤い靴》 2009　黄金町バザール2009での展示風景

参加アーティスト・公演団体紹介（現代美術_まちなかアーティスト）

71★



アーヒム・シュティーアマン&ローランド・ラウシュマイアー
Achim Stiermann & Roland Rauschmeier

1975年ニュルンベルク（ドイツ）生まれのシュティーアマンと、1974年アウグスブルク（ドイツ）生まれのラウシュマイアーによるユニット。マッキントッシュコンピューターのプロセッサーを人間に例え、コンピューターが人間的な存在として活動する、コンピュータープロセスの実写版というべきヴィデオインスタレーション《Man OS1/extraordinateur》を出品予定。

《Man OS1/extraordinateur》 2001-2008

72

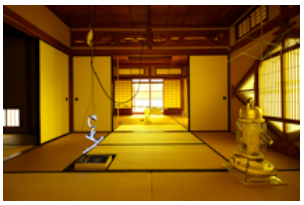


トーチカ　TOCHKA

ナガタタケシとモンノカヅエによるクリエイティブユニット。デジタルカメラによる長時間露出とコマ撮りアニメの手法を融合し、空中にペンライトの光でアニメーションを描くという画期的な作風、『PiKAPiKA』を編み出す。マルチメディアグランプリCG 部門ベストジングル賞受賞、仏アヌシー国際アニメーション映画祭ノミネート他の賞歴をもち、実験的手法を用いた作風のアニメーション、グラフィック、イラストなどで幅広く活躍している。 新作の《PiKAPiKA》立体視アニメーションを使用したインスタレーション作品を発表予定。

«PiKAPiKA»2007

73★



梅田哲也　Tetsuya Umeda

1980年熊本県生まれ、大阪府在住。音と空間を基に作り出す作品等で、幅広く国内外で活躍する。気圧、重力の変化による現象や、廃品や日用品、扇風機など身近にある家電の回転運動や水の流れなどを用いた実験的なインスタレーションやパフォーマンス作品を展開。

《ぬ間》2010　愛知県豊田市喜楽亭での展示

74★



山本高之　Takayuki Yamamoto

1974年愛知県生まれ。Celsea College of Art and Design大学院修了後、アーティストとして国際的に活躍。子供が交わす会話や彼らの遊びに潜む創造的な感性を通じて、人間を育む社会の制度や慣習などの特殊性をシニカルに描き出すプロジェクトで知られる。

《スプーン曲げを教える(レッスン１、シャージャ・アートセンター、アラブ首長国連邦)》 2003

75★



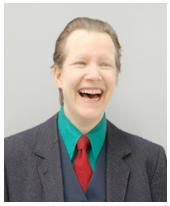
山下麻衣 + 小林直人　Mai Yamashita + Naoto Kobayashi

1976年千葉県生まれの山下麻衣と1974年千葉県生まれの小林直人によるアーティストユニット。 自然や生物と関わり、制作過程とその結果を、主にヴィデオインスタレーションとして表現する。社会の既成概念から一歩踏み外そうとするアプローチは、日常に小さな奇跡を起こす。

《infinity》 2006

参加アーティスト・公演団体紹介（パフォーミング・アーツ）

76★



アントニア・ベアー　Antonia Baehr

1970年ドイツ生まれ、ベルリン在住。振付家、監督、パフォーマーであり映画制作を手がけている。感情の起伏や表出の仕方の多様性を、ミニマルなアプローチで作品にする。「Laugh」「Over The Shoulder」の他、ボーリーン・ブドリー、レナーテ・ロレンツによる関連インスタレーションも展開予定。

《Laugh》©Julie Pagnier

77★



ボリス・シャルマッツ　Boris Charmatz

フランス在住。レンヌ及びブルターニュ国立振付センターの芸術監督を兼任。社会に対するクリティック、そして生の経験の記録と伝達への根源的な問いとして、パフォーミング・アートの可能性を探求する様々な表現を試みている。今回は、《Quintette Cercle》を屋外公演し、また１時間につき１名、チケット制の体験型映像作品《héâtre-élévision》を展開する。

《héâtre-élévision》©Anna van Kooij

78



チェルフィッチュ　chelfitsch

1997年結成。劇作家・演出家の岡田利規が率いる演劇カンパニー。チェルフィッチュ（chelfitsch）とは自分本位という意味の英単語セルフィッシュ（selfish）が、明晰に発語されぬまま幼児語化した造語。現代を象徴するような日本語による台詞と、日常的でだらしない身体性など、斬新なオリジナルスタイルで脚光を浴び、国内外で注目を集めている。今回のトリエンナーレでは、新作を上演。

《わたしたちは無傷な別人であるのか？》撮影：Nobutaka Sato

79★



スティーヴン・コーヘン　Steven Cohen

1962年ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。リール(フランス)在住。ヴィジュアルアーツの制作と並行して、ギャラリー、美術館や公共空間にて、パフォーマンスを実現してきた。南アフリカ出身の白人、ホモセクシャル、ユダヤ人である彼は、アイデンティティの中に潜む疑問をテーマとした作品を発表している。彼の表現には、常に高い独創性と研ぎ澄まされた美意識が存在する。「Chandelier(シャンデリア)」他、名古屋をリサーチしたサイトスペシフィックな作品の公演を予定。

《Chandelier》©John Hogg

80★



コンタクト・ゴンゾ　contact Gonzo

contact Gonzoとは、2006年にダンサーの垣尾優と塚原悠也が開発・命名したメソッドの名称。人と人との間に起こる「接触」というシンプルな物理現象に起因する様々な瞬間的な事象を通し、自らにとっての「世界の仕組み」を紐解こうとする方法論。一見するとただの殴り合いのようで、時に洗練されたダンスのような優雅な動きも垣間見える特異なパフォーマンスの模様は、「You-Tube」などのメディアを使って即時的に発表される。現在、大阪を主な拠点として活動。今回は会場としてパフォーマンス上演を想定していない空間を敢えて選び使用する。

撮影：竹田伊織

81★



デルガド・フッシュ　Delgado Fuchs

2002年にスペイン出身のマルコ・デルガドとスイス出身のナディーン・フッシュによって結成される。ブリュッセル王立音楽院やストリップクラブでキャリアを積んだマルコ・デルガドと、チューリッヒやベジャール・バレエ・ローザンヌでダンスを学んだナディーン・フッシュの強靭な肉体によるパフォーマンスはダンスの概念を抜け出し、常に観客に身体や動きの再定義を投げ掛ける。2007年以降ヨーロッパ、カナダ及びアメリカで公演を行っている。日本初来日。

桃色のズボンと赤いヌバックの先の尖ったハイヒールをはいて、襟ぐりが緩んだセーターの上に着た空色のウールのロングコート
撮影：Sophie Ballmer

82★



ティム・エッチェルス&ヴラトゥカ・ホルヴァ　Tim Etchells and Vlatka Horvat

フォースド・エンターテインメントの芸術監督、ティム・エッチェルスにアーティストのヴラトゥカ・ホルヴァが加わり、あいちトリエンナーレ2010のための新たな共作《Over the Table》を世界初演。美術館の展示空間に置かれた５つのテーブルをステージに見立て、３人の遊び心あふれる対話と交流の探求プロセスを１時間、１テーブルごとに展開する。

《Over the Table》Courtesy of the artists

83★



フォースド・エンターテイメント　Forced Entertainment

劇場、インスタレーション、ヴィデオ、ニューメディアといった多様な形式で展開。日常の言葉やシチュエーションを詩的に用い、神話や既成概念への挑戦、現代社会における夢や悪夢を表現する。今回公演する《Quizoola!》では、トークショウでありクイズ、そして時には尋問のごとく、６時間にも及ぶ質疑応答のセッションを繰り広げる。

《Quizoola!》©Hugo Glendinning

参加アーティスト・公演団体紹介（パフォーミング・アーツ）

84



ヤン・ファーブル　Jan Fabre

1958年ベルギー・アントワープ生まれ。演劇やオペラの演出家、振付家、作家、ヴィジュアル・アーティストとして作品を生み続ける、現代の最も革新的かつ多才なアーティストとして世界的に知られている。今回のトリエンナーレでは、2008年アヴィニヨン演劇祭（フランス）で発表され、絶賛されたソロ・ダンス公演『Another Sleepy Dusty Delta Day ～またもけだるい灰色のデルタデー』を日本初演する。

《Another Sleepy Dusty Delta Day》 撮影：Jean Pierre Stoop

85



平田オリザ + 石黒浩研究室（大阪大学）　Oriza Hirata + Ishiguro Laboratory (Osaka

平田オリザは1962年東京生まれ。「現代口語演劇」を唱え、90年代の小劇場演劇の流れをつくる。劇作家・演出家、劇団「青年団」主宰、東京・こまばアゴラ劇場支配人、大阪大学教授など、演劇はもとより教育、言語、文芸などあらゆる分野で活躍している。今回のトリエンナーレでは、平田オリザが脚本・演出を担当し、知能ロボット研究の第一人者で「世界の生きている天才」ランキング(英Synectics/2007年)では日本人最上位の26位に選出された大阪大学の石黒浩教授のチームと共同でロボット版『森の奥』を世界初演。

ロボット演劇プロジェクト《働く私》 2007

86★



平山素子　Motoko Hirayama

愛知県名古屋市出身。東京都在住。日本のコンテンポラリーダンス界をリードする振付家・ダンサー。卓越した身体能力と繊細かつダイナミックな表現力をもつ。ボリショイ劇場バレエ団にてS･ザハロワに振付する等ダンスのジャンルを超えた活動や、逢坂卓郎(ライトアート)のLED等とのコラボレーションも多数。今回は長者町エリアにある料亭河文を会場とし、まず茶菓の呈上からパフォーマンスは始まる。それに続きダンスが行われる。

撮影：長洲賀一智

87★



アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル + ジェローム・ベル + アンサンブル・イクトゥス

Anne Teresa De Keersmaeker + Jérôme Bel + Ictus

ローザスとベルギー王立モネ劇場等との共同製作による最新作『3Abschied ドライアップシート(3つの別れ)』を日本初演予定。マーラーの『大地の歌』をベースにダンサー、オペラ歌手、ミュージシャンが拮抗する斬新な舞台。ローザスの振付家アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルと、フランスを代表する振付家のジェローム・ベル、現代音楽のアンサンブル・イクトゥスが舞台上で共演する。

《3Abschied ドライアップシート(3つの別れ)》 撮影：Herman Sorgeloos

88★



ソニア・クーラナ　Sonia Khurana

1968年サハランプール（インド）生まれ、ニューデリー在住。自身の身体を表現媒体として、パフォーマンスや映像など様々なメディアとのかかわりを描き出す。今回は、都市や空間との出会いの究極の形を、公共の空間に自ら身を横たえるパフォーマンスを通して提示、また写真作品なども展開する。

image from the project《lying-down-in-the-ground : version I》 ©2006

89★



まことクラヴ　Makotocluv

2001年ダンサー・振付家の遠田誠が他のメンバーに呼びかけて発足。空間の内と外、行為と無為、ポップと不穏など、様々な物事のハザマ・境界線のありかに表現行為の糧を求め、脱領域型の舞台作品を創作する。その活動域は劇場に留まらず、金沢21世紀美術館、国立新美術館などの展示空間、映画館、役所、電車内、商店街など野外のオープンスペースにも飛び出し、サイトスペシフィックな出し物を展開している。今回はトリエンナーレ会場内の複数の空間に注目し、愛知芸術文化センターより、会場を変えて連続的に公演を行う。

©427FOTO

90

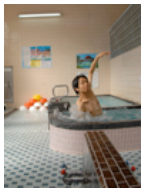


ニブロール　Nibroll

1997年結成。振付家、映像作家、音楽家、ファッションデザイナー、照明美術家、ジャーナリストなど、各分野で活動を行う表現者を中心に、作品テーマごとにさまざまなアーティストが参加。舞台空間を中心に作品発表を行いつつ、美術館でのビジュアル作品の発表など、既成の枠に捕らわれず新たな「アート」としての表現を追究している。東京を主な活動拠点としながら、欧米やアジアなどでも作品を発表し、注目を集めている。今回のトリエンナーレでは、新作を上演。

《ロミオORジュリエット》撮影：Kenki Iida

91☆

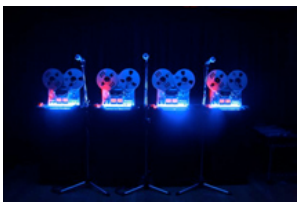


野村誠　Makoto Nomura

1968年名古屋市生まれ。ピアノなどの楽器で演奏する作曲作品に加えて、老人ホームでの共同作曲、鍵盤ハーモニカで動物園の動物とセッション、銭湯でお湯や桶を使った音楽会を行うなど、現代音楽の可能性を開拓する作曲家。あいちでもこれまでにない音楽を発表する。今回は、プールを会場に、水の音を用いた、これまでにない形の音楽作品を発表する。

参加アーティスト・公演団体紹介（パフォーミング・アーツ）

92★

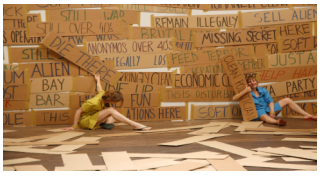


Open Reel Ensemble　オープンリールアンサンブル

2009 年より和田永を中心に、佐藤公俊、 吉田悠、難波卓己、吉田匡で活動を開始。 オープンリール式のテープレコーダーを改造し、「楽器」として演奏するという手法によって、不可思議な回転音楽を奏でる。長者町の特徴的な空間「旧荷さばき場」を舞台にパフォーマンスを行う。

撮影：堀之内毅

93★



ラ・リボット　La Ribot

1962年マドリッド（スペイン）生まれ、ジュネーブ在住。ラ・リボットことマリア・リボットはダンサー、振付家、ヴィジュアルアーティストとして活動。ユーモアとエキセントリックさ、そして言葉に対する深い解釈が彼女の作品の特徴。約6時間という長さの「Laughing Hole(ラフィング・ホール)」他、新作「PARAichi-Distinguidas」を予定。

《Laughing Hole》

94



ローザス　Rosas

1983年結成。振付家のアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルが芸術監督を務めるベルギーを代表するダンスカンパニー。ベルギー王立モネ劇場専属カンパニーの経歴を持ち、パリ・オペラ座やニューヨーク・リンカーンセンターを始め世界各国で上演され絶賛されている。今回のトリエンナーレでは、日本のコンテンポラリーダンスの火付け役となったローザスデビュー作『ローザス・ダンス・ローザス Rosas danst Rosas』を愛知単独で上演。

《Rosas danst Rosas》　撮影：Herman Sorgeloos

95★



梅田宏明　Hiroaki Umeda

1977年東京生まれ。2000年より創作活動を開始。自身の作品では振付・ダンスのみならず映像・音・照明デザインまで担い、「振付家、ダンサーというよりVisual Artist でありMoverである」と評価され、ヨーロッパを中心に世界各地の主要フェスティバルに招聘されている。今回のトリエンナーレには、 パフォーマンス２作品『Adapting for Distortion』（日本初演）と『Haptic』を上演する他、納屋橋会場のボーリング場跡地においてインスタレーションも発表する。

《Haptic》　撮影：Shin Yamagata

96☆



山川冬樹　Fuyuki Yamakawa

1973年ロンドン生まれ、神奈川県在住。ロシア連邦トゥバ共和国の民族音楽における独特の歌唱方法、ホーメイを巧みに操り、芸術の境界線をまたにかけた脱領域的活動を展開。骨伝導マイクといった医療機器などのテクノロジーを介し、身体を空間化させる。あいちでは、気息をテーマに新作を予定。

撮影：高木由利子

参加アーティスト・公演団体紹介（あいちトリエンナーレ2010　プロデュースオペラ）

97





アッシャー・フィッシュ　指揮（Asher Fisch）　栗國淳　演出（Jun Aguni）

愛知県文化振興事業団企画制作のプロデュースオペラ、オッフェンバック作曲「ホフマン物語」（新制作）。オペレッタ作曲家として19世紀のヨーロッパで一世を風靡したオッフェンバックの未完の大作。詩人E.T.A.ホフマンの物語を元に、主人公である詩人・ホフマンが、自身の破れた３つの、少し奇怪な恋の物語を友人たちに語る、幻想的な作品。世界中のオペラハウスで客演する指揮者アッシャー・フィッシュと、洗練された演出が高い評価を受けている栗国淳が個性豊かな歌手陣を率いて幻想の世界を作り上げる。歌いあげるキャスト陣には指揮者と演出家が国境を越えて厳選した優れたアーティスト達が集う。アルトゥーロ・チャコン=クルス、加賀ひとみ、カルロ・コロンバーラ、幸田浩子、砂川涼子、中嶋彰子　ほかＡＣ合唱団、名古屋フィルハーモニー交響楽団。

参加アーティスト・公演団体紹介（映像プログラム）

98★

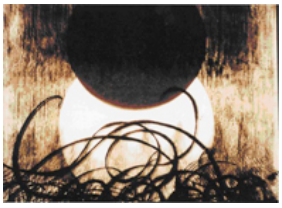


有吉達宏　Tatsuhiro Ariyoshi

1984年愛知県生まれ、東京都在住。20世紀初頭の表現主義絵画を思わせる画面は、木炭鉛筆で描いた膨大な数の絵をアニメーションとして動かすことによって生まれる。精神の奥にある闇と光、または絶望の果ての希望に焦点をあて、作品の中で問いかけを行う。

《君に触れる》2008

99★



石田尚志　Takashi Ishida

映像作家／美術家。1972年東京生まれ。絵画に時間の概念を導入するコンセプトに基づいた、抽象的なドローイング・アニメーションを制作。映画『部屋／形態』(1999年)『フーガの技法』(2001年、企画：愛知芸術文化センター)や、映像インスタレーション『海の壁ー生成する庭』(2007年)など、建築や音楽に言及した特異な作品で知られている。

《フーガの技法》2001

100★



金東薫　Donghoon Kim

1977年、韓国全州(チョンジュ)市生まれ。映像作家。2009年に制作した『チケット売り場の桜井さん』が、2010年開催の「第60回ベルリン国際映画祭」フォーラム・エクスパンデッド部門に出品され、注目を集める。8ミリ・フィルムで撮影した、独特の映像美と構築性に特色がある。

《チケット売り場の桜井さん》 2009

101★

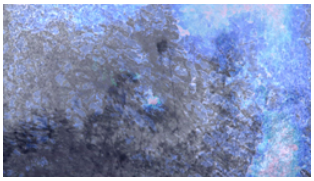


倉田愛実　Ami Kurata

1985年京都府生まれ、在住。故郷の町や少女の暮らす部屋など、身近にある場所に着目し、そこから美しい物語を紡ぎ出す。繊細な視点から世界を描くことにより、日常の暮らしの大切さを気づかせてくれるようなアニメーション作品が生まれる。

《シェルター》2007

102☆



牧野貴　Takashi Makino

映像作家。1978年東京生まれ。2001年、単身ロンドンに渡り、ブラザーズ・クエイのアトリエで音楽と照明について学ぶ。2009年、『still in cosmos』が、世界最大の実験映画祭「25FPS 国際実験映画祭」でグランプリを獲得。フィルムとヴィデオ、二つの方法、技術を最大限に活用し、映像と音楽を同価値に捉えながら、映画を制作、発表している。

《Inter View》2010

103★



ジョナス・メカス　Jonas Mekas

映像作家／詩人。1922年リトアニア生まれ。1944年、反ナチス・ドイツの地下新聞発行活動が発覚したため、故国を離れる。ドイツでの難民キャンプ生活をへて、1949年にニューヨークに渡る。以来、同地を拠点に、非商業ベースで制作する、インディペンデント映画の批評、上映、配給、保存の全般に渡る活動を展開している。

《リトアニアの独立とソ連邦の崩壊》 2008

104★



岡田昭憲　Akinori Okada

1979年愛知県生まれ、在住。若者にみる現代の不条理をテーマに、人形や粘土、淡い水彩、影絵を用いてメルヘンの世界を描いたり、社会を諷刺したりするアニメーションを制作している。多彩な手法で自在に物語を紡ぎ出する「イメージの魔術師」と自らを称す。

《今此処》2009

105★



奥山順市　Jun'ichi Okuyama

1947年東京生まれ。映像作家。1960年代より一貫して、フィルムの物質性や、フィルムを映写することそのもの、あるいはそのプロセスやメカニズムが孕む構造性に着目し、映画の本質を探求する実験映画を制作。その作品には、独特のユーモアの感覚が流れており、独自のスタンスを獲得している。

《映画・Le Cinéma》1975

参加アーティスト・公演団体紹介（映像プログラム）

106★



ニコラ・プロヴォスト　Nicolas Provost

1969年ベルギー・ロンス生まれ。映像作家、ヴィデオ・アーティスト。劇映画に属する中編作品や、短編の実験映画など、多様なスタイルの作品を制作する。映画を成立させている文法に着目して、その構造を露わにする作風で、観る者に映像とは何かを意識させ、再考を促す、知的なアプローチに特色がある。

《プロット・ポイント》2007

107★



アリアンヌ・ミシェル　Ariane Michel

1973年パリ生まれ。映像作家、ヴィデオ・アーティスト。風景と動物をモチーフに、それを注意深く凝視して、微細な変化を掬い取ってゆく映像作品やヴィデオ・インスタレーションを制作。説明的な要素をそぎ落とした静謐な作品からは、自然と人工の関係性や、自然の中にある人間とは何かを、観る者に想起させる。

《丸い眼》2006

108☆



ベン・ラッセル　Ben Russell

1976年、アメリカ生まれ。シカゴを拠点とする映像作家。フィルム作品を中心に、写真やインスタレーション作品も制作する。初の長編『彼ら一人一人、辿り着くであろう場所に行かせなさい』(2009年)は、2009年の「トロント国際映画祭」でプレミエ上映された後、多くの映画祭で上映され、話題となっている。

《彼ら一人一人、辿り着くであろう場所に行かせなさい》 2009

109☆



アレクサンドル・ソクーロフ　Alexander N.Sokurov

映画監督。1951年、シベリアのイルクーツク生まれ。中編ドキュメンタリー『マリア』(1975年)や、長編映画『孤独な声』(1978年)など、初期作品より一貫して、ドキュメンタリーと劇映画の双方をコンスタントに手掛け、その枠組みを越えて映像表現の新しい地平を切り拓き続けている。

《精神の声》1995　©North Foundation

110☆



ストローブ＝ユイレ　Straub-Huillet

映画作家。ジャン＝マリー・ストローブは、1933年フランス・メス生まれ。ダニエル・ユイレは、1936年パリ生まれ。先行する文学作品に基づき、それを厳密に映画化する独自の制作姿勢により、孤高の映画作家と称される。2006年に惜しくもユイレは没したが、ストローブは現在も活動を継続している。

《あの彼らの出会い》 2006

111★



辻直之　Naoyuki Tsuji

アーティスト。1972年静岡生まれ。『夜の掟』(1995年)など、画用木炭を用い、動きの痕跡を残して、運動とメタモルフォーゼの中間に位置するような、独特のアニメーションを制作し、注目を集める。代表作『影の子供』(2006年、企画：愛知芸術文化センター)は、2007年にアメリカの「アナーバー映画祭」で奨励賞を受賞した。

《エンゼル》2008

112☆



アピチャッポン・ウィーラセタクン　Apichatpong Weerasethakul

映画監督。1970年タイ、バンコク生まれ。ドキュメンタリーとフィクションの境界を意図的に揺るがせる独自の方法論により、映画や映像作品、写真などを手がける。映画監督として、今年の「カンヌ国際映画祭」で、タイでは初となる「パルムドール」(最高賞)を受賞した。美術の分野でも、多くの国際展に出品している。

《世紀の光》2006

参加アーティスト・公演団体紹介（企画コンペ入選キュレーター、アーティスト）

113★　ブライアン・アルフレッド　Brian Alfred
緻密に構成されたCGアニメーションと、都市の建築模型によるインスタレーション。

114★　ローレン・ベルコヴィッツ　Lauren Berkowitz
種子やドライフラワーなどを用いた、自然をテーマとするインスタレーション。

115☆　長者町デキタテ工房　Choja-machi DEKITATE kobo
出品作家：文谷有佳里、鄭萬英、李旻河。滞在して室内を改変。

116★　江幡京子　Kyoko Ebata
世界各国で高齢者の自宅室内を撮影する写真シリーズ。今回は愛知県でも撮影する。

117☆　上西エリカ　Erica Kaminishi
パズルをツールに鑑賞者同士が交流する。

118☆　北川貴好　Takayoshi Kitagawa
近隣地域から古電球を集めて光のオブジェを制作。

119☆　小島千雪　Chiyuki Kojima
室内に雲をモチーフとする映像を投影する。

120★　宮川ひかる　Hikaru Miyakawa
出品作家：ガリー・ロス・パストラナ、ホアン・ズオン・カム、宇多村英恵、宮川ひかる、山本高之。

121★　水田紗弥子　Sayako Mizuta
出品作家：池崎拓也、窪田美樹、清水悟、林加奈子。身体や皮膚の感覚に迫る作品を紹介。

122☆　小野友美　Tomomi Ono
絵画を壁面に何度も架け替えるプロジェクト。

123☆　大西治・大西雅子　Osamu Onishi,Masako Onishi
移動式のキャラクターと鑑賞者が交流する。

124☆　大山エンリコイサム　Oyama Enrico Isamu Letter
額作品の室内展示と、ビル壁面の壁画を予定。

125☆　櫻井裕子　Hiroko Sakurai
写真を編み込んで作った半立体の作品。

126☆　佐藤健博　Takehiro Satow
窓ガラス上に外の風景の一部を線状に描く。

127★　リサ・マレイ・シュミット　Lisa Marei Schmidt
チャード・ウェントワース）による立体作品やパフォーマンス映像など。

128★　孫遜（スン・シュン）　Sun Xun
墨等による白と黒を基調としたアニメーション、ドローイング等を展示する。

129☆　タムラサトル　Satoru Tamura
装置による光の点滅を室内外から鑑賞する。

130★　陳維錚（タン・ズイチン）　Tan JuiChen
出品作家：陳維錚、呉鴻、孟祥宇、胡鉑、陳如儀、マリアノ・チン。在外中国人の感性を表現。

131★　田中由紀子　Yukiko Tanaka
出品作家：平川祐樹、水野勝規、吉田知古。名古屋市港区の中川運河に取材した映像など。

132☆　戸井田雄　Yu Toida
床の傷跡を蓄光塗料で浮かび上がらせる。

133☆　トロロスタジオ＋栗本設計所／谷川寛＋栗本真壱　Tololo Studio + Kurimoto Desgin Studio / Hiroshi Tanigawa + Shinichi Kurimoto
赤・緑の光のループをまちなかに出現させる。